

情報化社会における大衆社会論の再検討

——自律性変数の修正を中心に

伊 奈 正 人

1. はじめに

この論文は、社会学史学会例会での報告（伊奈 2023b）を踏まえ、「情報社会」、「格差社会」の大衆化について考察したものである。本題に入る前に、例会での議論に一言しておきたい。そこで指摘を受けたのは、2つの「封印」である。

報告は、現代社会——その格差化、情報化——を、C. ライト・ミルズ（C. Wright Mills）の社会学——知識社会学、大衆社会論、社会学的想像力——から再考察しようとしたものだった。理論構成部分で、松村一志の社会学的想像力論（松村 2022）を大衆論として読み替える試みをした。最新の理論研究、方法論研究を踏まえた松村の論考を、「封印」されてきた大衆論に照らすことで、C. ライト・ミルズ（C. Wright Mills）の再評価も可能になるのではないか、と思ったからである。これに対して、例会では、従来の大衆論が前提としている区分、基本単位——個人と社会等など——は凡庸に過ぎるのではないか、という指摘を受けた。

これに加えてもう一つの指摘を受けた。大衆論は現代民主主義のダークサイドを問題化するというが、大衆論も欧米の社会理論であることには変わりはなく、アフリカ系の人々、アメリカ原住民、世界中のさまざまなマイノリティの問題やディバイドを「封印」した議論ではないのか。ハワード・ジン（Howard Zinn）らが描いた米国史と同じように、米国社会学史、社会科

学史を描き直す必要はないのか、と。¹

2 では、問題のコンテキストを整理し、論文の観点と全体の構成を説明する。

2. 「格差社会」の大衆化——情報大衆社会という問題文脈

大衆化は、無軌道な多数者という脅威＝ファシズム、少数者の合理性と多数者の民主主義への疑義とむすびついた議論である。積極的な組織化の方途を示した社会理論——経済計画論、計画経済論——の登場で、大衆化問題は解決済みのこととされた。「東西陣営」がそれぞれの方法で高度な産業化を達成し、「多数者の民主主義」が胚胎するリスクは回避されつつある、と判断された。20 世紀後半の産業社会——いわゆる「ゆたかな社会」、中流社会、消費社会における「自律的平等」——の展開のなか、大衆化はあまり論じられることがなくなった。

1980 年代以降の政策転換——いわゆる「小さな政府」論——以降、「西側」諸国では、グローバル化、情報化と「格差」が議論されるようになった。20 世紀の一期間、生のモデルとして国民的合意があるとされてきた家族、仕事、地域の枠組みの融解が指摘され、新たな「社会の結びなおし」（本田由紀 2014）の必要も提起されている。核家族、雇用労働などに代わる新しいモデルを示すことが社会学の現代的課題であることは、教科書的論点であると言ってもいいだろう。²

この従来の生の枠組みの融解を、新たな大衆社会的状況として、と考えることはできないだろうか。大衆社会は、ファシズム社会と同義とも言える。それは、民主主義および産業主義は矛盾を孕んだものであること、自由

¹ 北田暁大の北米社会学史研究は、ラザースフェルド（Paul Lazarsfeld）の系譜とデュボイス（W. E. B. Du Bois）の系譜を対比し、マイノリティの問題を計量的方法で論じた系譜を抽出した（北田 2014, 2019）。奥村隆が、亡命者のアドルノ（Theodor Ludwig Adorno）たちですら計量的な方法を用いた研究を行わざるをえなかったことを論じたことに言及している（奥村 2013）。ラザースフェルドとミルズの関係については、Sterne2005, Summers2006 を参照。

² 校内暴力、家庭内暴力は、1980 年の流行語である。

と平等が現実には両立しないこと、政治的、経済的、社会的な権利の要求は、無軌道に暴走するリスクがあることを痛撃した点において注目されたものである。重要な論点の1つが、平等化＝非構造化の進展である。ディバイドは問題あるものである。しかし、「社会の仕切り」によって、社会秩序の安定は保たれる。これが消失することで生じるリスクを大衆社会論は問題化している。現代社会論は、暴走のリスクとともに、仕切りのリスクを慎重に考察しなくてはならない。

伊奈 2023a でも論じたことだが、20 世紀の米国社会学は、宗教倫理に支えられた合理的なコミュニティを工業化に対応できるものに改造しようとしたプラグマティズムと、ファシズムのなかで分析的な合理性を探究した西欧思想を総合したものである。20 世紀社会の混沌＝大衆化の問題を、分析的な論理によって再構成する方法が対置された。一方で宗教コミュニティという核を持ち、他方で高度な産業化を達成した米国社会は、ヨーロッパの古典的社会科学者にも評価されており、米国の社会科学はこれを自負していた。米国社会学においては、大衆化は、特殊西欧の問題として退けられる。タルコット・パーソンズ (Talcott Parsons) はこうした文脈を総括した。それ以降——ポスト・パーソンズ——の社会科学は、極言すれば、方法を継承する意匠の繚乱であったとも言うる。

80 年代の経済政策の転換以降、「格差」が問題化する。「バブル」の時代も、格差化は水面下で着実に進行した。格差＝不平等は、自生的な秩序と自律性の根拠でもあり、新しい経済運営がこの時代固められた。「差別化」は、商業的戦略では盛んに用いられてきた。他方で、マルクス主義の側でも、格差化、窮乏化は組織化の根拠となるものであった。しかし、効果的な組織化がなされている様子は今のところない。こうした格差社会の状況は、大衆論の観点から再考察する必要はないか。伊奈 2020 から一文を引用する。

「冬の寒い日、貧しい人びとの立場に立つ政党の選挙演説に出かけると、こざっぱりしたファッションで、むずかしいことばを用いて政治を語る聴衆が

目についたという。他方、政権与党の選挙演説に出かけると、ネットをみて、やってきたのだろうか、安心を語り、国家の誇りをわかりやすいことばで語りかける政治家の話を、ボサボサの髪型よれよれの服装で、ぶつぶつとつぶやき、震えながら聞いている若者たちの姿が目についた、というのである。

これが若者の一面であることは否定できないだろう。彼らは、SNSや動画サイトを通して情報を得て、自分たちの声を発信する。メディア映えをめざしたやりとりは、いわゆる炎上を生み出したりもする。かつてのマスメディアのような一方的な情報の流れではない。しかし、ネットを通して一人一人に耳障りのいい情報が、狙いすましたように届けられる。

では、操っているのは誰なのか。強大な政治権力なのか。巨大な経済資本なのか。権力者の実体は見えない。政治家も、官僚も、財界人も、加速度がついて止まらなくなったような状況を制御（under control）できているようには見えない。強大なパワーゲームが、ときに冗談のような稚拙なことばや理屈やパフォーマンスで語られる。しばしばそれは堂々とまかり通り、政権政党は選挙で勝利し続ける。与党も野党も、あら探しに奔走し、貧相な政治、沈滞した経済は続く。」（伊奈 2020、新雅史氏談話より）。

経済学者の成田悠輔が、近著（成田 2022）で民主主義と産業主義について挑発的な問題提起を行った。専門のデータ科学を用いてエビデンスを示し、成田は言う。民主主義が進んだ国々の経済が衰退している。経済がうまくいっているのは、民主主義という点で問題を抱えている国々である。いっそ、すべて AI に任せればよいのではないかと。学術的な議論として妥当かどうかは置くとして、民主主義のタブーに踏み込んだ言説として興味深いと思った。情報化の時代に、新しい大衆論を提示しているからである。政治と経済の民主主義——平等や「ゆたかさ」——に疑問を呈する大衆論の問題はタブー視される。しかし、今再び大衆社会論が検討されるべきではないかと思った。

筆者は、西欧のファシズムと大衆社会、米国の戦後社会と大衆社会、

1980年代以降の格差社会化と大衆社会を比較し、米国社会学思想史を整理する試みを行った（伊奈 1991）。そこで、西部邁、村上泰亮らの大衆論、貴族主義的な大衆論の再評価などについても言及したが、格差社会、グローバル化、情報化などの変動についての検討は十分ではなかった。また米国社会学思想史の問題——とりわけ人種問題やいわゆる帝国主義の問題——の考察も欠けていた。本稿では、このことを意識しながら、大衆社会論のコンテクストを再検討してみたい。以下の構成を示す。

3では、戦後日本社会における大衆社会論争のコンテクストを再検討する。社会の自律性変数（“accessibility”と“availability”）の概念を柱として、現在の問題状況を検討する。4では、「新中間大衆論」を批判した見田宗介の議論を、自律性変数の観点から、再検討する。5では、大衆化への処方箋として提示された情報ネットワーク論——いささか楽観的な議論として退けられた議論——を再検討する。金子郁容が提示した“vulnerable”、“vernacular”の概念は、自律性のパラメーターとして考えることができると思うからである。6では、現代大衆論の手がかりとしての社会学的な言語論について検討を行い、ミルズの提起した語用論をもちいた知識社会学の可能性を論じる。7では、現代大衆論を、自律性2変数とパラメーター2つから考える意味を論じ、まとめにかえる。高草木光一の近著を手がかりに、ミルズの議論の限界を補填するものとしての鶴見俊輔の議論を検討する。

3. 戦後日本社会の“accessibility”と“availability”——大衆社会論の再考察

3.1. 戦後民主主義と大衆社会——「1960年」の大衆社会論

日本社会において、大衆社会論は、戦後民主主義模索のなかで議論された。そして、戦後改革を踏まえて、ファシズムへの回帰をチェックしながら、伝来の家郷、縁と向かいあい、合理的な社会の再組織化＝新しい家族像、地域像、仕事像などを提起することが、社会学に求められた。大衆社会論は、そうした民主主義の実践において、群衆行動のリスクをチェックする羅針盤として輸入・紹介された。

1960年の安保闘争のおり、多くの労働者や学生が国会を取り囲んだ。その際、大衆社会論の「うれしい破産」(清水幾太郎)が宣言された。ここで注意すべきは、清水は、この後も、大衆論の問題を探究し続けたことである。論点を2つ確認しておく。

第1に、清水幾太郎1966の議論である。「安保闘争」における清水の「経験に露出している幾つかの問題を追求しようとする試み」である著作『現代の経験』(清水1963、220)を踏まえて、民主的な秩序について、同書は省察している。そして、20世紀における認識の変化を、「反映から構成へ」と表現している。すなわち、明解な単線的因果関係など斉一的な世界を反映する認識から、複雑に絡み合って混沌とした世界を構成する認識への変化である。

批評家清水がこうした図式で表現しようとしているのは、素朴なリアリズムの転換である。抽象化と構成という用語を用いて、清水は、混沌とした世界の原基的構造を捉えようとする芸術・文芸思潮(シュールレアリズム、キュービズム、ミニマリズムなどの抽象芸術・文芸思潮)、哲学思想の動向、自然科学・社会科学の動向などを総括し、明解な批評的な知見を提起している。

第2に、清水幾太郎は、「少数者」の支配について考察し、「倫理的なもの」について論じている。清水が問いかけるのは、多数者が享受できる民主主義は、可能なのだろうか、ということである。大衆社会の「うれしい破産」を宣言した清水は、深刻な判断を示している。ヨーロッパの思想、アメリカの思想双方に通じた清水は、『倫理学ノート』の末尾に次のように書き付けた。

「現実の社会には、・・・二つのグループがあるようである。自然的欲望からの自由において、自ら高い規範を打ち立て、それへ向って自己を構成して行こうと努力する少数者と、自然的欲望の満足に安心して、トラブルの原因を外部の蔽うもののうちにのみ求め、自己の構成に堪え得ない多数者。飢餓の恐怖から解放された時代の道徳は、すべての「大衆」に「貴族」たることを要求するところから始まるであろう。しかし、それが不可能であるなら

ば、「大衆」に向かって「貴族」への服従を要求するところから始まるであろう。」（清水 2000 [1973]、437）

こうした清水の言説は、変節と見做されることもある。しかし、20 世紀の社会理論、そして上滑りな戦後民主主義に対する大衆論的な洞察を深めていったと見ることもできる。

3.2. 新中間大衆論——1980 年代の大衆社会論

80 年代には、経済政策の転換——教科書的に言えば「ケインジアン福祉国家」の終焉と格差化、ブレトンウッズ体制の見直しとグローバル化——と対峙した経済学者——西部邁と村上泰亮——が大衆論を提起し、注目を集めた。伝統や宗教、貴族的な精神性に注目したこれらの大衆論は、興味深いものだった。バブル期における、エズラ・ヴォーゲル（Ezra Feivel Vogel）的な言説を踏まえ、日本社会を論定する意図が見え隠れすることも、確認する必要がある。

村上泰亮は、公害が問題化した時代に産業社会モデルを検討し、社会学的視点も援用しながら、ダニエル・ベルの脱工業社会論の共同研究、そして日本社会独自の社会構造を見する共同研究（村上他 1979）を行った。村上の新中間大衆論（村上 1987）は、古典的な階級構造の融解を説いた作品として注目を集めた。

伊奈 1991 は、ソシオエコノミックスの提示、社会学的な比較経済体制論をめぐる議論を整理し、大衆論をはじめとするミルズ社会学の再読解と米国社会学思想史の再検討を試みた。しかし、冒頭でも述べたとおり、その整理は米国社会学の潮流を整理することにとどまっていた。一方で、グローバル化、情報化などの変動を踏まえ、他方で、人種や民族、国際的な不平等構造を視野に入れた大衆論の再検討、社会科学の歴史の描き直しは、視野の外におかれていた。

伊奈 2023a では、現代社会の大衆化について、ミルズを通して考えた。

数多くの定義のなかで、筆者が注目したのは、村上泰亮が新中間大衆——1980年代的な大衆社会状況——論のコンテキストを整理した論文である（村上1985）。コンパクトな論考だが、社会学史の布置連関を簡明に整理したものとしても読める。

村上は、外的構造＝社会構造と内的構造＝判断構造の非構造化として大衆化を定義した。この定義は、ウィリアム・コーンハウザー（William Alan Kornhauser）の自律性変数論（Kornhauser 1959）をもとにしたものである。コーンハウザーは、“accessibility”と“availability”の2変数から、大衆化を把握する。すなわち、構造の喪失を平等化として肯定的にとらえるとともに、堅牢な判断構造、核となる価値から“availability”を論じた。

コーンハウザーは、2変数により、米国社会科学が西欧社会のファシズムを克服しうること、そして西欧から米国への世界史の焦点移動が起こることを論定した。村上の議論は、西欧文明の総括を行ったコーンハウザーの議論と同様、米国から日本へと世界史の焦点移動が起こることを暗示している。社会科学史の総括と歴史構想の「前向き」な方向づけ——米国文明の転換——を素描した試論であると言える。

これに対して、マルクス主義的な社会理論は、中間階級の階級分解を再組織化することを眼目とする。それ故、階級構造の融解という議論とは真っ向から対立する。村上の議論は、SSM調査の地位非一貫性論などとともに、こうしたマルクス主義の社会理論に対するイデオロギー的な反論とも言えるものである。これに対して、後藤道夫の議論が、注目される。後藤はいちはやく問題状況を、「日本型大衆社会」として批判した（後藤2001）。格差社会、不況、強権政治、政治の退嬰を批判し、対抗的階級の民主的組織化をめざす議論であった。

判断構造の問題は、村上泰亮以降の社会理論において、問題の核心であり続けた。情報化、グローバル化、消費社会化は、新しい判断構造を生み出すかもしれないという期待があり、そうした趨勢とは距離をとっていた社会学者も、「消費する人びと」の判断力、“availability”に期待する議論を提起し

はじめる。4では、そうした社会学者の1人である見田宗介を例にして考察する。

4. 情報資本主義社会の“accessibility”と“availability”——見田宗介を中心に

4.1. 自律性変数としての相乗性、至高性——見田宗介の村上泰亮批判

見田宗介は、朝日新聞の論壇時評（1985年4月25日付）で村上1984をとりあげた（見田1987所収 38f.f.）。見田は、村上の議論が、人間の欲求を相剋的なものとしてとらえるが故に、秩序維持の地平として、外部からの他者規制、内部からの自己規制の択一に直面する、と批判している。

見田は、自律性の地平として、今ひとつ別のものがあることを指摘している。そして、「性的関係や芸術的創造＝享受の関係や〈生きがい〉欲求のように、〈他者のよろこびが自己のよろこびでもある〉という人間欲求の「相乗性」を軸とした社会を構想すること」を提起している。そして、こうした胎動の認知を「事実判断の問題」としている。

見田は、その後、情報消費社会を肯定的に論じた著作を出版する（見田1996）。³そして、たまごっちやFF7の可能性を語り、パタイユを引用して、消費の可能性を慎重に検討している（見田宗介、竹田青嗣、新井満、石弘之、山口勝『未来潮流』1997年6月21日、NHK教育TV）。すなわち、私利私欲に基づいた消費の「高次」の形態——至高性——を想定し、資本主義的消費を点検している。そこで情報空間の財は、リアルな空間を汚染することはない大きな可能性を持つものと考えられている。

しかし、見田は、1997年の神戸連続児童殺傷事件、1999年のネットアイドル南条あやの自死、そしてミレニアムにクローズアップされた少年犯罪などと対峙することになる。そして、情報空間における外的、内的構造の融解という問題——“availability”の問題——とあらためて取り組んでいく。

³ 真木悠介名義で、近代的世界とは異なる世界に生きる人々のことを描きだした見田宗介に期待した人々には、消費を肯定し、加藤典洋1995などの私利私欲論と対話を始めたことは深刻に受けとめられた。

4.2. 戦後社会の構造転換——見田宗介における自律性の問題

見田宗介は、「まなざしの地獄」（見田宗介 2008 [1973]）で連続殺人事件の犯人 NN を論じた。「生い立ち」によって決められた「相応の生」に満足できなかった集団就職者が、犯罪に追い込まれていくメカニズムが描かれている。まなざしの機制から逃げ続けた NN は、生の解放の衝動のやり場もわからず、「連続殺人者」となる。

見田宗介は、ネットアイドルの南条あやを考察した論考「愛の散開／自我の散開」（見田 2006）でまなざしの問題を再検討している。南条は、ネット上で不特定多数に見つめられること、入院の病床で点滴をつけられて自由が制約され治療が行われることなどに安心な居場所を実感したという。それは、「まなざしの天国」であったのだろうか。

ネット上のかかわりやつながりは、取り替えや組み替えがきく。全人格的なものではないし、一切のしがらみも重荷もない。「使い勝手」だけが極大化された選択的なかかわり、つながりである。そして、不特定多数の承認は、リアルに感じられる。そこで「抱擁の感覚」を得た南条はどうなったか。そのいのちは、カラオケボックスの一室での自死により永遠に封印されてしまう。

この論考で、見田は2つの構造転換を対比している。すなわち、60年代における伝統的な地縁、血縁関係の解体と再構成。そして、80年代以降のグローバル化や情報化によるさらなる再編成。

1960年代の日本は、地方の人々を大量に動員して、工業化を推し進めた。この過程で家郷が解体される。家郷は、人間が生きていく上での物質的なよりどころ＝「生活の共同体」であった。またそれは、精神的なよりどころ＝「愛情の共同体」でもあった。上京した大量の人口は、都市のさなかでこの二つの根拠をもとめた。そして、二つの要請を満たす「絶妙の形式」として、「〈核家族／市場経済〉システム」（見田 2006、16）が見出された。そう見田は言っている。

しかし、グローバル化、情報化という変動のなかで、「落としどころ」の

再検討が必要になる。核家族という親密性＝よりどころの形式は見直しが迫られるに至る。雇用のあり方も大幅に変わった。見田は、親密性、共同性を解体し、地球大に広がってゆく市場のドラスティックな散開を考察している。散開する社会のなかで、親密性のよりどころがネット上に創り出されている例として、南条あやは考察されている。

こうした「愛の散開」は、「憎しみの散開」と対比される。散開する自己というリアルにおいて、愛も憎しみも散開する。ネット上で承認されるものは、不特定多数の無差別への憎しみ、「誰でもよかった」という動機である。見田は言う。「17歳の犯罪」における「憎悪の熱情の濃縮と散開のダイナミズムを、「愛」の熱情に反転するなら、さみしがりのリストカッターになるのではないか」（見田 2006、122）、と。

見田は、喪失された親密性を考察する。そこで、見田が注目するのは「非在」の感覚である。「山青く水清き第一次共同体」は高度成長期に喪失された。その「非在」に向かう愛着は、家族の核となるものを見すえ、核家族という装置を抽出した。現代社会は、そうした親密性の核をも解体する。充たされることのない「さみしがりのリストカッター」の渴きは、市場経済の拡大のなかで、親密性の「非在」に向かって、「中心を失って散開するさびしさの洪水である」。そう見田宗介は言っている。

4.3. 極化のリアル／制御のリアル——情報化社会の“availability”

見田宗介は、情報消費社会の構造（accessibility）と制御（availability）、そしてその焦点——あるいは／そして（and/or）虚焦点（大沢真幸）——を以上のように描いた。資本主義的な秩序の根底にある「狂気」が暴走を制御する可能性を見据えながら、アンバランスな両義的均衡としてのグローバルな情報消費社会における秩序の現在形を論じている。マルクス主義の資本主義論、物象化論にも、社会学の“consummatory”論にも通じた見田ならではの洞察であると言えるように思う。

20世紀の文学作品は、旧来のつながりや人間存在の尊厳を徹底的に解体

してゆくものとしての、市場経済や科学技術の徹底した転回に対する不安を描いた。20世紀末の想像力は、散開し、統合を失うことを、遊び、踊り、狂うというような、イメージでとらえた。滅私奉公も立身出世も消滅してしまった「神なき時代」において、「オウム真理教的なもの」——たとえば象の帽子で踊ったこと——なども、「遊びこなせる」と見なされた。しかし、これを転回点として、真理や理想、極化を渴望する若者が問題となる。

すなわち、不特定多数を対象とした理由が不可解な犯罪が少年犯罪、ネット犯罪として問題化される。不特定多数が集まった理由が不可解な練炭自殺なども注目された。

動機の明確な殺人や自殺は、容易に納得され、忘れ去られてしまう。理由の不可解な自殺や殺人は、リアリティを極化して、一種の「神々しさ」をたたえることになる。カルトの救済活動、「不可解」（藤村操）な集団自殺や無差別の犯罪といったこうした時代の儀式は、陳腐なものである。しかし、陳腐であるがゆえに「神々しい」とも言える。

不特定多数への散開、「神々しいもの」への極化は、ネット社会における愛と憎しみのリアルの基本構造と言えるかもしれない。人格や家族というまとまり、おさまりを喪失した匿名の愛や憎しみは、時に移ろい、また無軌道に暴走する。規範的なもの、理想や価値、極や中心を喪失した不安や衝動は、なかみのない「純度 100%」（土井隆義 2002）を渴望して暴走する。鬱積した不満や怒り、愛や欲情は、不可解な犯罪や自殺として、執拗な迷惑行為として、あるいはネットのいわゆる「炎上」、いじめといったいけにえの儀式として噴出する。

4.4. リアルの抽象化と制御——リアリズムの転換と自律性変数

「神なき時代」における渴望、欲望の暴走は、新しい問題ではない。科学技術の発展や重化学工業化が始まった 19 世紀末から 20 世紀にかけて、すでに問題になっていた。

工業化は、人種的、民族的、経済的、あるいは性的な「マイノリティ」た

ちを、排除するのではなく、動員することで可能になった。こうした人々は、大きな戦力ではあったが、無軌道な暴走が懸念されていた。暴動や、狂気や、退廃や、周縁、性的なものといった、精神や社会の「病理」が問題化する。

奥村隆は、秩序の近代化を考えた教科書的著作で、前近代的な共同体を「同じだからまとまる」ものとした。これに対し、近代社会は、「違うからまとまる社会」を探究することとされた（奥村 1997、86）。これに照らすならば、ネットやケータイでメディア化されている人間関係は、「（個人をも）ばらばらにすることでまとまる社会」であるといえよう。

個人をもばらばらに解体することで、合理的な組み替えや編集、目的に応じた制御が可能となる。これが「（個人をも）ばらばらにすることでまとまる」ことの意味である。こうしたまとまり、つながり、かかわりをメディア化したものが、ネットやケータイではないか。

見田宗介も言っていたように、今日 20 世紀社会に相対的に安定を与えていた枠組み、市場と親密性の対立の絶妙な落としどころとしての家族制度と雇用制度が見直されている。それが故に、旧来の家族や地域の道徳を美化して秩序の回復をはかる言説もあるが、それでは自在に散開する市場経済は成り立ちゆかなくなる。⁴

5. 情報ネットワーク論の再考察——“vulnerable” と “vernacular”

以上、見田宗介の情報消費社会論についてまとめた。自律性変数には、“accessibility” と “availability” とパラレルな、相乗と相克の地平があることを論じた議論であった。しかし、消費の至高性に注目した議論は、核となる価値の問題を十分に論じきれてはいないように思う。本節では、自律性変数の別の地平を展開した議論として、金子郁容の情報ネットワーク論を読解す

⁴ 本節は、未公開原稿の一部に、授業などでの討議を踏まえて大幅に加筆したものである。

る。議論のポイントは、金子の“vulnerable”概念と“vernacular”概念を、自律性変数と関連付けて読解することである。

5.1. 情報ネットワーク組織論——“vulnerable”な価値

金子郁容 1992 は、情報ネットワーク論、ネットワーク組織論の議論を、ボランティア論へと展開したものである。見田宗介の相乗と相剋を基本とした立論に対して、ネットワーク市場、ネットワーク組織などのアイディアを用いて、——私利私欲の原理を堅持しつつ——共生問題に対する回答を示している。

この本が書かれたのは、バブル経済を背景に、メセナ、フィランソロピーなどが、もてはやされた時代である。その当時においても、金子の議論は楽観的すぎると批判された。また、情報化という点でも、まだパソコン通信が普及しつつあった時代の議論である。しかし、情報資本主義の基礎づけという点で、今なお検討の価値があると考ええる。

では、金子はなにに注目したのか。一言でいえば、情報ネットワークは、これまでの産業組織や企業組織のあり方を一変させる可能性をもっているし、それによって「福祉」のあり方も違ってくるということである。自由な欲望追求の企業活動自体が、相互扶助を前提にした方が効率的ということにならないとはいいきれない。「情報化」は、それを可能にするという判断が、金子の議論の基本にあるように思う。

企業組織は、ハイラーキー（上下の位階制、階級制）をなし、その行動結果は不平等なハイラーキカルなもの（上下の位階層をなすもの）であることは、資本主義下では不可避である。そして、利潤追求の競争は、ハイラーキーをもたらす。というよりも、社会の秩序は、「弱者」（被差別者、しょうがい者、高齢者など）の“vulnerability”——金子の捉え方によると、攻撃誘発性——に暴力が集中されることにより、保たれる傾向がある。

「敵」や「弱者」の存在は、強力な秩序要因である。「弱者」への「やさしさ」が、人間共同、社会秩序の要因となることもないではないが、それは類

まれなる善意等々に期待するしかなかった。結果として、いわゆる「弱者」は、「人様」や「おかみ」の世話にはならない、と突っ張るようになることも少なくない。自分で「始末」をつける老人の自殺率は、時代や地域にかかわらず高い。

これに対し、「情報ネットワーク論」は、情報化にともなう産業基盤の構造的変化が、利潤追求とハイラーキーの問題にけりをつけ、逆に社会的貢献を要求するようになるという。硬直化したトップダウンのハイラーキカルな組織において、平均化された情報に基づき行動する企業は、情報のネットワークからは、はみ出してしまう。柔構造の多重組織が、積極的に社会貢献に参加してこそ、多種多様な情報——金子や今井賢一のことばでは「場面情報」（今井、金子 1988）——が得られるというわけである。

5.2. 情報ネットワーク論と“vernacular”な関係——自律性の4変数

金子は、この議論を「ボランティア」という関係性に応用している。そして「弱さ」をさらけ出し、「手助けする場所をあけておく」ことの重要性を説いている。「車椅子を押させてやっている」と胸をはる老人の談話を始め、啓発的な例があげられている。ただし、残存する不平等に関しては、ハイラーキーの頭かくして尻かくさずだと、マルクス主義者ならば批判するだろう。実際、“vernacular”概念を援用し、「不平等の公正」、本来的な人間的関係としてのボランティアを論証しているのは、たいへん鋭い議論であると同時に、強引な議論でもある。⁵

金子の議論は、企業行動論、産業組織論の展開を通じたミクロ理論の革新という当時の学問動向と、歩調を合わせている。その場合イリイチ（Ivan Illic）流の議論が混入することは、大きな問題と呼ぶに違いない。金子は、

⁵ マルクス主義の批判を予想し、またハイエク（Friedrich August von Hayek）らによって展開された正義論、社会的公正性の議論を踏まえた上で、資源分配のでこぼこの「本来性」を基礎づけようとしている。これ自体はきわめて周到な議論で鋭い。しかし、“gender”、“vernacular”概念の慎重な検討がないと問題のすり替えともとられかねない議論であるとも言える。金子は周到に言及はしている。

さらに経済関係に「本来的」社会関係の回復を説く経済人類学者 K・ポラニー（Polányi Károly）の議論をも援用している。ともあれ金子の理論的野心を、今改めて、確認しておきたい。

“vernacular”な関係においては、「違い」は「本来的」ということになる。ネットワーク社会においては、「不平等な公正」が成立する。そこで、公正性の可非は、ネットワーク論の面白味という観点から留保されている。金子の議論のポイントは、情報化により、企業の存在理由がドラスティックに変化し、「弱さ」をさらけ出すことが、ネットワーク参入の条件になる、というアイディアの斬新性である。

自生的個体差を認め、「個性」として活かすことにもひらかれた関係性を、“vernacular”と呼ぶことで、ネットワークの自律性が根拠づけられている。「根をもつこと」（ヴェイユ 1967 [1949]）、ナショナリズムや生活実感の重視などの問題も、ここで結び結ぶ。“vulnerable”なものは、弱者としてセン引きされたものではなく、可能性を持ったものとして考察することができる。“vulnerable”と“vernacular”は、価値と構造という対置に照らすと、“availability”と“accessibility”とパラレルな自律性変数の問題として、理解することもできる。

6. 情報大衆論と語用論——社会学的想像力における方法の問題

6.1. 情報大衆論と言語論——西部邁と社会学的想像力

2でも述べたとおり、こんにちでは、政治、経済、文化の深刻な劣化を冷徹に見つめ、活路を断念し、判断構造の問題は AI に任せたほうがましではないか、と挑発的に主張するデータ科学者も登場している（成田 2022）。この議論を、大衆化する社会に対する毒のある状況認識、情報大衆論の提示として読むこともできるだろう。将棋や囲碁などのゲームにおいても、AI を「どう使うか」が問題になっている。学校や職場においても、——ルールのなかで——生成型 AI とどう向き合うか、どう使うかが議論され、急速に普及し始めている。情報化の最先端においても、村上泰亮の言う判断構造が問題になっていると言えるだろう。

こうした判断構造の問題の核にあるのが、価値理念、価値規範の問題であった。西部邁の場合は、伝統的規範、貴族主義的な精神性、プラグマティズムをベースとした「制度派経済学」などを総合し、保守思想の再評価を行い、経済倫理学を提起した（西部 1983a,b）。こうした立論は、最初の著作である『ソシオエコノミックス』（西部 1975）の問題意識を継承発展させたものであると思う。

価値理念の構造の論定に西部が用いたのがタルコット・パーソンズの知見である。当時、青木昌彦らがすでにジョン・ロールズ（John Bordley Rawls）を引用し、新しい経済学を探求していた。西部は、「ロールズは極端な合理的個人を想定する点で新古典派的思考の真髄を代弁しているとすらいえる」（西部 1975, 33）として、これを批判している。

また、異質なものを総合する青木の体系構築にも疑問を提起している。「消費論についてはH・ギンタス、企業論についてはJ・ロビンソン、そしてコミュニティ論についてはJ・ロールズという、容易に調和するはずのない三者を張り合わせたモザイクは、異形のもののようには見えてならない」（西部 1975, 193）、と。

西部の方法は、「理性的なもの」を言語からとらえる着想である。いわゆる言語論的転換以降の社会学においては、常識的なものであるとも言える。しかし、経済学に社会学的アプローチを取り入れ、新しい体系構築をめざしたことは、当時の経済学としては画期的であった。

「理性というのは、ホモ・サピエンスというよりも、むしろE・カッシーラーからS・K・ランガーに至るホモ・シンボリックスの考えに近い。あえて理性というのは、すでに理性に目覚めた現代においては、感性的シンボルの意味を確かめるのにも理性が必要だと思うからである。」（西部 1975, 193）

西部は、理論的枠組みとして、パーソンズのAGIL図式、シンボリック・

メディア論を用いた体系化の道筋をしめしている。⁶ 言語の構造と機能に注目する議論は、その後『知性の構造』（西部 1996）において、修正図式（TEAM 図式）が示され、体系化され、知識社会学的な思想分析に用いられている。それは西部の判断構造論＝貴族主義的な大衆論の要諦である。その基本的な着想は、すでに「ソシオエコノミックス」において示されている。

「シンボリック・メディアについて次のような区分けが可能であろう。まず、一つに潜在性・顕在性の軸と、二つに同化・異化の軸を設定する——この両軸の設定自体は言語学の類推によるものである。相対比較でいえば、潜在的で同化的なメディアとして言語が、顕在的で異化的なメディアとして権力が、顕在的で同化的なメディアとして貨幣が、そして潜在的で異化的なメディアとして影響力を取り出すことができる」（西部 1975, 237）。

6.2. 社会学的想像力の再検討——松村一志の論考を中心として

西部の議論は、「大衆社会的なもの」＝判断構造の融解に対するアンチテーゼを探究したものである。要として位置づけられたのが社会学的な言語論の着想であった。西部が着眼したシンボリック・メディア論は、言語論的な社会科学のピボットとして、その後も様々な社会学者により継承、発展されている。

さて、ここで、冒頭で言及した松村一志の社会学的想像力論（松村 2022）を検討しておきたい。『社会学的想像力』は、大衆化と向き合う——もしくはは向き合わない——社会学を批判し、自らの方法論を提示した著作である。松村 2022 は、社会学的想像力の限界を指摘し、再構成が必要である、と提起して、注目をあつめた。

なぜ再構成は必要か。社会の社会学化、社会学の常識化のため、社会学的

⁶ 西部は、ルーマンとの関わりでの議論は展開していない。西部 1976 も参照しながら、西部とパーソンズ、ルーマンを比較した論考としては、春日 1981、春日 2005 などを参照。

想像力を定義する社会の構成単位、区分などが無効化しているからである。そして、言表と言説を焦点にして区分や単位を洗い直すことで、社会学的想像力を再定義することを提案している。これを、ルーマン（Niklas Luhmann）、ラトゥール（Bruno Latour）といったコンテクストを展望、総括する、学説史、思想史の提案として見ることもできると思う。

大衆化＝非構造化という読み替えが可能だとして、その合理性を視野に入れたラディカルな分析性のなかで、社会学的想像力のユニット・アイディアを考えることが示唆されているように思った。社会学の凡庸化は、異化媒介的契機の喪失であり、社会学的「想像力」の問題が提起されており、一方、既存の単位や区分の無効化の指摘により、「社会学的」想像力の問題が提起されている。無効化している区別や単位を再検討することで、社会学的想像力を異化することが主張されている。

この論考は、ミルズ研究にとっても、示唆に富む論考である。単位、区分の無効化については、大衆化＝非構造化と照らし合わせてみる必要があるだろう。そして、「社会学の常識化」——科学性や批判性の問題も含めて——については、公共社会学との関わりで考察をしてみる必要がある。

6.3. 語用論と公共社会学

ミルズの出発点は、プラグマティズムの社会心理学、コミュニケーション論をベースにした知識社会学の再定義だった。その核となる視点は、ことばの問題である。ミルズの言語論は、その後の洗練された言語論の展開とは比べようもない。しかしながらミルズは、動機の語彙論の先駆者という定評を得ている。

もう一つ重要なのは、冒頭でも述べたように、ミルズが、チャールズ・W・モリス（Charles W. Morris）の影響のもと構想した“sociotics”の視点である。この視点は晩年の社会学的想像力論においても、用いられている（伊奈 2023a）。ポイントは、“sociotics”が、「語用論の社会的次元」として定義されていることである。この定義は、ミルズ社会学を理解する上で、重

要である。この定義により、社会学が、「誰でもアクセス利用できる（accessible and available）社会学」＝公共社会学であるかどうかが問題化される。そして、大衆社会論との関連も問い直される。このように、ミルズの初期知識社会学の着想は、後期の公共社会学、大衆社会論の要と解釈される。

以上を確認した上で、ミルズの社会学的想像力についてあらためて検討してゆく。社会学的想像力の定義に、個人と社会という区分、単位が用いられていることは間違いないだろう。あまりにも常識的で、凡庸で、陳腐化しているものである。では、なぜミルズはこうした立論をし、それを社会学的想像力ということばで括ったのだろうか。分析的な計量的方法、概念的方法によって見失われているもの、論じ残されているものがあるから、あえて、こうした区分、単位を設定したと考えることはできないか。

民主主義、産業主義が内包する大衆論的な問題に向かい合ったパーソンズをはじめとする社会学者たちは、実在の分析的再構成による、米国の宗教コミュニティの改造に活路を求めた。そのなかで、個人と社会などの区別、単位は記述的なものとして退けられ、分析的な区別や単位が体系化された。これに対して、ミルズが問題にしたのは、こうした解決において置き去りにされてしまう大衆の問題である。

問題解決のための戦略や政策を提示する社会科学——最適解をもとめる方法、工学的な着想、経験的調査方法など——の価値は否定しがたい。しかし、そうした方法を示し、彫琢するだけで、問題が一掃されるわけではない。むしろ問題は「封印」される。

パーソンズやその継承者たちが展開した分析的な議論——権力、階級、貨幣、歴史、所有などへの理論展開と経験研究の蓄積——を上手に活用するためにも、陳腐で凡庸なものになってしまった常識的な区別や単位にあえて戻って、もう一度考えてみる必要がある。これが、ミルズの言いたかったことではないか。

プラグマティズムの問題解決の知は、分析的なツールとの接合によって、問題解決のパラダイムを精緻化すること——もしくは問題解決の定義を分析

的に変換すること＝知の工学化、戦略化——に貢献した。ミルズがこれを大衆論の観点から批判したことは、伊奈 2023a 他でも詳しく論じた。

さて、すぐ前でも述べたようにミルズがこうしたコンテキストにおいて、社会学的言語分析を提示した際、モリスの記号論——とりわけ語用論の社会学的次元——に注目した（Mills 1939）ことに再び注意したい。こうした着眼により、市民による、生活のことば、学問のことばの「使用」、「使い手」、「使いこなし」等の問題を問うことが可能になる。知識社会学的な視点は、米国の民主主義、産業主義、そして社会科学が、暗黙に自負している前提を省察し、封印を解くことを可能にする。

これを論じたミルズの最初の論文の題名は、「言語、論理、文化」（Mills 1939）である。言語における価値次元＝文化と、その展開＝論理を対象化する議論が展開されている。そこで、ことばの使用と価値次元が対照されている。

ことばの使用において、潜在的な価値の次元が持ち込まれていることについて、ケネス・バーク（Kenneth Burke）が引かれている。「物とうごきの名称は善し悪しの言外の意味をこっそりもちこんでいる。・・・名詞は見えざる形容詞をともないがちであり、動詞は見えざる副詞を伴いがちである」（Burke 1954 [1935], 233-234）。

論文の最後では、中国語彙における価値次元について、デュルケム学派のマルセル・グラネ（Marcel Granet）の知見を引用して論じている。そして規範、文化、慣習の変化について次のように言っている。

「以前は、絶対的な信念が支配していたところに、問題が発生し、二つの意味が競合する。思考は、社会秩序内の変化や葛藤の価値的な側面に、意味という点で関わる。視点が変化すると、分離して見える事柄が伝統的には結合したものと考えられる。社会性と精神、言語と社会的慣習、思维的なものと文化的なものを結びつけたときに、思考と知識に対する社会学的なアプローチのための座標がどうなるかを、私は示した。」（Mills 1939）

この部分に注がつけられ、資本概念について説明が付け加えられていることにも注意したい。複式簿記の導入と資本主義の展開とのかかわりで、フェティッシュなメカニズム——欲望の暴走と制御の問題——が成立していることに言及している。そして、テキサス大学の指導教員であるエアーズ (C. E. Ayres) に、資本という論点を学んだことが注記されている。

ことばの潜在的次元を論定する理論構成を、「原基的なもの」と「派生的なもの」と照らし合わせることも可能であろう。ただし、上でも触れたように、ミルズの場合、たとえば言表と言説などの関係を精緻に論じることはしていない。生活のことばや学問のことばを「使えること (accessible and available)」——平たく言えば生活や学問の「こなし感」——を、ミルズは探求し続けた。明確に述べられているわけではないが、ミルズにおける「原基的なもの」の探求とは、上滑りで皮相な民主主義や産業主義を省察し、「根」にあるものの封印を解くこと、と考えることができるか。そう考えることが可能ならば社会学的想像力は、人びとの生活に「根ざし」、かつグローバルな視点をもった問題解決思考ということになるだろう。

ここで、米国論壇で、ミルズが「もっとも米国的な米国批判者」(All American, Anti-American) と言われていたことに注意したい。合理的なコミュニティに「根付いた」はずの米国の生活自体が、「第三世界」、「途上国」と言われる国々の存在、世界戦争、人種や民族の問題の上に成り立っているものではないか。ミルズの立場から歴史や思想史を省察する場合に、この問いは不可欠である。

7. まとめにかえて——高草木光一の鶴見俊輔論を手がかりに

以上、現代社会の情報化と大衆化を考えると、自律性の変数——“accessibility”と“availability”——、そして「ちがいを価値づける概念——“vernacular”と“vulnerable”——が手がかりとなることを論じた。そして、公共社会論／大衆社会論の観点から——「誰でもアクセス利用できる (accessible and available) 社会学」を用いて——自律性を問題化するときに、語用

論を柱としたミルズの言語論的な知識社会学が有用であることを示した。これにより、格差社会の問題は、多様なものの共生という問題に接続される。

ここでは、自律性変数、それとパラレルな2概念は、現代民主主義の条件を考える手がかりとなるものであろう。しかし、たとえば、それらを自律性の4変数として理論的に検討することはここではできない。紙数の問題もあるが、タクソノミーや概念の遊戯には慎重でありたいと思われるからである。ここでは、まとめにかえて、一つの例解として、鶴見俊輔の思想実践に言及する。

ミルズは、『キューバの声』で、キューバ革命を生き抜いた民衆を一人称に、「対岸」から「アメリカ人さん」に切々と話しかけている。訳者の鶴見俊輔は、原題の“Listen Yankee”のニュアンスを、巧みな訳題に編み直した。鶴見の実践は、ミルズの実践と照らし合わせて見ることができる。たとえば、鶴見の『思い出袋』（岩波新書、2010）は、自らの履歴、時代の歴史を振り返り、ことばを編み直す実践、想像力の実践を語っている。これを社会学的想像力の実践編として読むこと＝編みなおすことも可能ではないか。

高草木光一の鶴見俊輔論（高草木 2023）は、こうした観点から、重要な著作であると考ええる。ミルズへの言及はない。しかし、鶴見俊輔と対比しながら、ミルズ思想を考えるのに、示唆に富む論点がたくさん示されている。そこで、この本を論じることで、本稿のまとめとしたい。⁷

高草木光一は、アナキズム研究、1848年革命研究、戦後民主主義思想研究などを行い、「いのち」をキーワードにした教育を実践してきた人である。高草木 2023 の論点は多岐にわたるが、本稿でも検討した次の4つの論点に絞って、鶴見論をまとめてゆきたい。

米国哲学、北米体験の総括に基づく、戦後の民主主義と学問の省察。

“vulnerable” なものの可能性の論定。

原基的なものとしての“vernacular”な「根」の考察。

⁷ 本節は、伊奈 2023c の一部を踏まえ、加筆したものである。

「純度 100%」の否定と、混沌の思想の探求。

高草木が問題にしているのは、「1968」前後の社会思想である。

冒頭、日本では明治以降、イデオロギー、立場にかかわらず、上滑りで、地に足のつかない思想があったこと、他方で、政治や思想の「根」と向かい合い、問いかけを行った「気高い」実践があり、鶴見俊輔がそれと向かい合い続けたことを論じている。

高草木は、「一般に流布している「平和と民主主義」の鶴見像は、白塗りの仮面をつけた演技の側面が強く、素顔の鶴見は、「平和と民主主義」とは相容れない」（高草木 2023, 6）と冒頭で述べている。戦後思想における「平和使い」、「反戦使い」、「興行悪」等を見つめてきた人として鶴見俊輔は描き出され、皮相で上滑りな民主主義思想、学問思想と対比されている。そして、民族主義とインターナショナリズム、天皇とアナキズム、民族主義とアナキズム、外来思想と伝統思想、論理的思考の力と陥穽等などに取り組んだ思想家鶴見が描き出される。

“vulnerable”なものという論点については、鶴見が「論理的思考の落とし穴」を見つめていたことが論じられている。一例として、「老人力」について、「弱み」こそ「強み」とされている。すなわち、「自覚された自分の弱み（ヴァルネラビリティー）にうらうちされた力が、自分にとってたよりにできるもの」。これに続いて、ハーヴァード大学のホワイトヘッド最終講義への論及が紹介され、「精密さはいつものものである」という一文が引かれている。さらに、「明晰から混沌へという逆コースのなかに豊饒の可能性がある」と断じられている（高草木 2023, 171-174）。鶴見が、ミルズと同様、分析的な視点からは忘れられがちなモリスを高く評価していることにも注意したい。

こうした思考の問題は、“vernacular”なものと結びつけられて論じられる。高草木は、鶴見俊輔における「根もどからの民主主義」を紹介している。「この私の中の小さな私のさらに底にひそんでいる小さなもののなかに、

未来の社会のイメージがある」として、そこに民主主義を根拠づけようとしている（高草木 2023, 199）。

例えば、高草木は、葦津珍彦の民族主義にアナキズムの契機を読み取る。そして、「天皇を百姓農夫としか見ないような神道の外典、偽典を足がかりにして国家神道に収斂されない非国家神道の歴史」を探究した夢野久作の思想、すなわち「国家神道の伝統を骨抜き」にする「九条の遙か以前から」の平和思想を論じる。そして、それこそが、戦後民主主義を超えるための「細い根」であると言っている（高草木 2023, 224）。

一方高草木は、アナキズムを、「正典が削り落としてしまった民衆レベルの理念と心情を語り継ぐ外典」（高草木 2023, 218）としてとらえ、石川三四郎のアナキズムに伝統的なものを読み取る。「アナキズムを、「人間の社会習慣の中に、なかばうもれている状態で、人間の歴史とともに生きてきた思想」とひろく捉えれば、伝統的な思考と接点を持つ」（高草木 2023, 228）、と。こうして、ニセモノの民主主義とは違う、「根もどからの民主主義」を探究した鶴見俊輔が描き出されている。

ここで、外来ニセモノ思想の峻拒として、万才（現在の漫才）について論じられていることにも注意したい。「海外よりすぐれた文化をもった人びとが来る。その新しい文化をすみやかに身につけて支配層が語りはじめる。・・・支配者のなめらかなことばは、それをあやつれない民衆にとっては、一種の暴力である。これに対する沈黙にかざりをあたえたものが、形のずれたことばとしての万歳芸だった。・・・ボケとツッコミとの掛け合いは、大きく言えば異文化の衝突をソフトランディングさせる過程を描いているものと、鶴見は見なしている」（高草木 2023, 251-253）、と。

鶴見の万才論は、論理的合意（コミュニケーション）とやりとりの間合い（ディスコミュニケーション）を考察したものである。「支配者のなめらかなことばは、それをあやつれない民衆にとっては、一種の暴力である。これに対する沈黙にかざりをあたえたものが、形のずれたことばとしての万歳芸だった。」（高草木 2023, 251）。

万才論は、鶴見俊輔のプラグマティズム批判、そして政治思想批判にも応用されていると高草木は言っている。すなわち、「漫才・・・については、何をどう語ろうとも、そこに鋭利な意図が隠されているなどだれも考えない。国家と国家のあいだのスキマから国家概念そのものの解体を目指そうとする広遠な意気、日本の当たり前の生活から世界を震撼させるような新たな地を立ち上げようとする高き志」（高草木 2023, 338）。それは、「「白塗りの正義」の体現者、裏を返せば差し障りのない民主主義や平和主義の旗手」に對抗する志である、と。

次に、北米哲学、北米体験の総括について。高草木は、途上国の労働の問題、米国の原住民やアフリカ系の人びとの問題、さらには「南の国」の人々の問題をつぶさにした鶴見良行と、鶴見俊輔を対比的に考察している。「俊輔は、垂直方向に、自分の根本へと下降してそこに法や国家という人工物を超える普遍性を見いだそうとする。良行は、水平方向に、さらなる奥地へと分け入っていく。辺境といわれるところへ行けば行くほど、世界は具体的に拡がって」いく（高草木 2023, 291）。これらは、思想における「原基的」な「根」を探求する二つの「志」である。「いのち」の視点から——とりわけ民族・人種の視点から——知の歴史を描き直すことが提起されている。

高草木の論考は、本稿が展開してきた自律性の4変数、すなわち“accessibility”と“availability”、それとパラレルな“vulnerable”と“vernacular”、それを使いこなす実践の考察を、具体的に論じたものになっている。鶴見俊輔と鶴見良行ら思想家、そして戦後民主主義と関わった人びとによる、「1968」の総括や「北米体験」の総括は、20世紀におけるファシズム体験の総括と同様、新しい世界史像の探求を要請しているように思われる。大衆社会論は、西欧文明の転換、米国文明の転換を照らし出してきた。グローバルな情報社会、消費社会にこの観点を応用することで拓ける展望は、見田宗介が論じた今ひとつの地平を描き出す一歩となるように思う。

文献

- 青木昌彦ほか編, 1977, 1978, 1979, 『経済体制論』(I. 経済学的基础; II. 社会学的基础; III. 現代資本主義; IV. 現代社会主義) 東洋経済.
- Burke, K., 1954 [1935], *Permanence and Change*, Univ. of California Press.
- 土井隆義, 2008, 『友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル』ちくま新書.
- 後藤道夫, 2001, 『収縮する日本型“大衆社会”——経済グローバリズムと国民の分裂』旬報社 2001.
- 本田由紀, 2014, 『社会を結びなおす——教育・仕事・家族の連携へ(岩波ブックレット)』岩波書店.
- 伊奈正人, 1991, 『ミルズ大衆論の方法とスタイル』勁草書房.
- 伊奈正人, 2020, 『文庫版解説』C. ライト・ミルズ『パワー・エリート』ちくま学芸文庫.
- 伊奈正人, 2023a, 「C. ライト・ミルズの政治的公衆論再考: 社会学的想像力と歴史的
特殊性を中心として」『東京女子大学論集』73(2) 57-81.
- 伊奈正人, 2023b, 「現代はミルズを前にしてなにを意味するか——アメリカ社会学史再考」日本社会学史学会関東例会報告(2023年5月13日).
- 伊奈正人, 2023c, 「書評 高草木光一著『鶴見俊輔——混沌の哲学』岩波書店 2023」『図書新聞』3615.
- 今井賢一, 金子郁容, 1988, 『ネットワーク組織論』岩波書店.
- 北田暁大, 2014, 「社会学にとって「アメリカ化」とは何か: ポール・ラザースフェルドと「アメリカ社会学」」『現代思想』12月号.
- 北田暁大, 2019, 「事実をもって「白人問題としての黒人問題」に迫るデュボイスの実証主義の倫理」大賀哲他編『共生社会の再構築2』法律文化社.
- Kornhauser, W., 1959, *The Politics of Mass Society*, Free Press (辻村明訳『大衆社会の政治』東京創元社, 1961).
- Mills, C. Wright, 1939, "Language Logic and Culture" *American Sociological Review*, vol. 4, no. 5 (佐野勝隆訳「言語、論理、文化」青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房, 1971).
- 春日淳一, 1981, 「N. ルーマンのメディア論について」『関西大学経済論集』第31巻第1号.
- 春日淳一, 2005, 「社会科学における説明図式の次元構成: 3次元か4次元か」『関西大学経済論集』第55巻第1号.
- 松村一志, 2022, 「方法を理論として読む—社会学的想像力のフロンティア」『現代思想』2023年1月号.
- 見田宗介, 1987, 『白いお城と花咲く野原』朝日新聞社.
- 見田宗介, 2006, 『社会学入門』岩波新書.
- 見田宗介, 2008, [1973], 『まなざしの地獄——尽きなく生きることの社会学』河出書房新社.
- 村上泰亮, 1984, 『新中間大衆の時代——戦後日本の解剖学』中央公論社.
- 村上泰亮, 1985, 「ゆらぎのなかの大衆社会」『中央公論』5月号.
- 村上泰亮, 公文俊平, 佐藤誠三郎, 1979, 『文明としてのイエ社会』中央公論社.
- 成田悠輔, 2022, 『22世紀の民主主義選挙はアルゴリズムになり、政治家はネコになる』(SBクリエイティブ) 2022.
- 西部邁, 1975, 『ソシオエコノミックス』中央公論社.

- 西部邁, 1976, 「メディア論ノート」『経済評論』第25巻第7号.
西部邁, 1983a, 『経済倫理学序説』中央公論社.
西部邁, 1983b, 『大衆への反逆』文藝春秋社.
西部邁, 1996, 『知性の構造』角川春樹事務所.
奥村隆, 1997, 『社会学になにができるか』八千代出版.
奥村隆, 2013, 「亡命者たちの社会学——ラザースフェルドのアメリカ／アドルノのアメリカ」『応用社会学研究』55号 2013.
高草木光一 鶴見俊輔混沌の哲学：アカデミズムを越えて 2023 岩波書店.
戸坂潤, 1930, 『日本イデオロギー論：増補版（戸坂潤著作集2）』勁草書房.
Sterne, J., 2005, "C. Wright Mills, the Bureau for Applied Social Research, and the Meaning of Critical Scholarship" *Cultural Studies↔Critical Methodologies*, Volume 5 Number 1.
Summers, John H., 2006, "Perpetual Revelations: C. Wright Mills and Paul Lazarsfeld" *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol. 608, Nov., 2006, *Politics, Social Networks, and the History of Mass Communications Research: Rereading Personal Influence* (Nov., 2006).
清水幾太郎, 1963, 『現代の経験』現代思潮社.
清水幾太郎, 1966, 『現代思想』（上）（下）岩波書店.
清水幾太郎, 2000, [1972], 『倫理学ノート』講談社現代文庫.
ヴェイユ, S, 2020, [1949], 『根をもつこと』春秋社.

キーワード

大衆社会, accessibility, availability, vulnerable, vernacular